（研究課題概要書様式５－３号：完了課題用）

身入り向上によるブランドアサリ創出のための垂下式養殖技術の開発

（予算区分 県単独　研究期間 平成 27~28 年度）

担当：水産技術研究所　浜名湖分場　上原陽平

【研究の背景とねらい】

- 浜名湖のアサリの漁獲量は、近年、不安定な状況にあり、収入の安定に対する漁業者の思いは極めて強くなっています。安定収入のため、漁獲量の安定維持に加え取引価格の向上等が考えられますが、後者については具体的な取組はありません。
- アサリの価格決定には、サイズ(殻長)と身入り(肥満度)であり、高価格取引が見込める“身入りの良いアサリ“の確保に対する漁業者の期待は高くなっています。
- アサリの垂下式養殖は、餌代が不要、身入りの向上等のメリットが指摘されています。一方、飼育器が重く作業負担が大きいことや、導入する地先の環境(餌、流れ等)に適した養殖手法の検討が課題となっています。
- 本研究では、身入りの向上によって付加価値を高める養殖技術の開発を行いました。

【研究成果】

- 浜名湖内５か所において養殖試験を行い、浜名湖産天然アサリ(天然貝)と肥満度を比較したところ、秋期に平松、気賀、猪鼻湖の湖奥部において高くなり、冬～春期にも高くなりました（図 1)。また、冬～春期のへい死数は秋期と比べ少ないことから、浜名湖における垂下式養殖は、冬～春期に湖奥部で行うことが適していると示唆されました。
- 肥満度と相関があり、餌料環境の指標であるクロロフィル a（chl-a）の濃度を養殖試験と併せて調査したところ、肥満度が高かった試験区で chl-a 濃度が 10μg/L 以上であったことから、この値が冬期における養殖適地の目安となると考えられました。

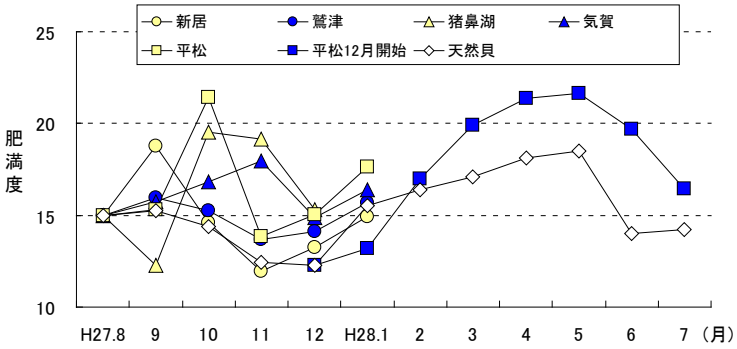

図１　各試験区の養殖貝と天然貝の肥満度の推移

- 従来の飼育器（従来型：図 2 左）は、基質である砂利が重く、水抜けが悪いことで作業負担が大きいが、軽石を基質とした網型の構造をした飼育器（新型：図 2 右）は作業負担が小さいことがわかりました。また、新型は肥満度も天然貝より高く、従来型とほぼ同じであったことから、新型が垂下式養殖に適していることを明らかにしました。

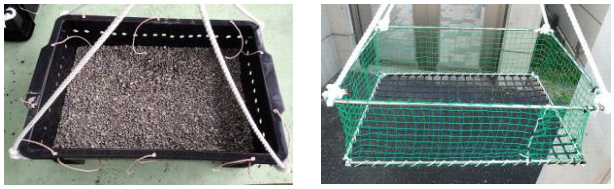

図２　従来型（左）と新型（右）の飼育器

-

【研究成果の普及方法】

- 収入安定に寄与できるよう、浜名漁協の漁業者を対象に垂下式養殖の技術普及を行います。
- 食の料理人などとも連携し、試食会などを通じて、身入りの良い浜名湖産ブランドアサリの確立に努めていきます。

（作成　平成 29 年 3 月）